

相模原市域（神奈川県北西部）における維管束植物相の特徴

三樹 和博

Kazuhiro Miki: Characteristics of the Flora in Sagami-hara City Region

はじめに

神奈川県は、県単位の維管束植物相（以下フロラ）調査では先進県である（田中，2002，2003）。また本県中央に連なる丹沢山地の総合調査は、1964年より3度行われており、フロラに関するデータも残されている（国立公園協会編，1964；神奈川県公園協会丹沢大山自然環境総合調査企画委員会編，1997；丹沢大山総合調査団編，2007）。相模原市域におけるフロラ調査は、高橋（1982）や相模原市教育委員会社会教育部社会教育課編（1988）によって行われた調査の中でフロラリストがまとめられている。また合併前の旧相模原市域のみを対象にした標本目録も2度発行されている（相模原市立博物館編，2003；相模原市総務局総務課市史編さん室編，2009b）。しかし、本稿で対象とする神奈川県北西部に位置する現相模原市の山間部（旧津久井郡内）のフロラは、『神奈川県植物誌2001』（神奈川県植物誌調査会編，2001）のための集中調査によりかなり明らかになったが、それ以後も未解明な部分が残されていた。2006年度からの平成の合併により次年度までの間に、旧津久井郡四町（城山町，津久井町，相模湖町，藤野町）は相模原市に編入され、相模原市は面積328.82 km²の新市域となった（神奈川県全土2415.81 km²の約14%）。そしてこの合併を機に、相模原植物調査会による新市域植物調査が2006年度より行われることとなり、2010年度までに旧津久井郡地域を中心に綿密な調査を行った。その後も調査は継続されており、相模原市立博物館で保管されている標本は2015年6月末現在で51,000点を上回っている。植物の種数についても、学名未照合のものなど登録が完了していないものを除いても2,500種（亜種変種を含む）を上回っており、『神奈川県植物誌2001』（神奈川県植物誌調査会編，2001）に記載されている神奈川県内産3001種（亜種変種を含む）の約85%程度に達する。これは大まかな比較に過ぎないが、新たに確認されたものの中には、県内で相模原市域のみ

で見られる種も含まれており、調査の成果はこの地域のフロラをある程度反映したものであると考えられる。調査結果は3度にわたり報告されており（宮崎・秋山，2008，2009，2010），フロラの詳細が明瞭になるに連れ絶滅の恐れのある植物の選定も可能となり、神奈川県レッドデータブック（勝山ほか，2006）の定量的判定基準に則り、相模原市内で確認された植物種の中から絶滅危惧植物の5つのランクに該当する76種が掲載された（秋山・宮崎，2008）。それ以後もコマツカサスキ（秋山，2010a）やウスヒメワラビ（秋山，2010b）など県内では希少性の高い種の発見が続いており、2015年6月末現在では137種の絶滅の恐れのある植物が記録されている。相模原市内でも開発などによる自然環境の破壊が進んでいるため、神奈川県レッドデータブックや環境省レッドリストに掲載される植物種数が増加することが今後予想される。また、田中（2005）によると、この地域の北端に位置する小仏山地や南側の丹沢山地周辺が、神奈川県内に分布する希少種のホットスポットに該当する地域であるとされ、県内でも希少な種を多く含むエリアであることが確認されている。

本稿では、これまでに報告されたフロラの記録と実地調査で得られた分布データを利用して相模原市域のフロラの特徴を考察することとした。

調査区域の概説と調査方法

神奈川県は襲速紀系植物種の分布する東端に位置し、富士箱根や丹沢地域に代表されるフォッサ・マグナ地域にも含まれるため、フォッサ・マグナ地域特有の種が多く見られる（高橋，1971）。基本的には相模原市域もその一画に位置している。

神奈川県内は標高800 mまでは暖温带域とされ（宮脇，1972），市域南側の丹沢山地（最高は蛭ヶ岳の1673 m）と北側の小仏山地西部（最高は生藤山の990 m）は冷温带域に達している。その両山地に挟まれた範囲には、標高375 mの城山から702 mの石老山までの低山が里

山地域を形成している。山梨県側からは相模川（山梨県内では桂川）が東へと流れ下り、城山山麓までは、県内で最古の地質である相模湖層群や小仏層群の岩盤を深く削り込んでいて（相模原市総務局総務課市史編さん室編，2009a），下流側の相模原台地南縁に向かい合う小倉山（標高 327 m）からは南西へなだらかな河岸段丘が形成されている。相模川の支流である道志川もまた、山麓部に急峻な段丘崖を形成し、流域の地形を変化に富んだものになっている。

本稿では現相模原市の全域を対象に、フロアの概観を確認する目的で、既存の県内植物誌や研究データに新市域植物調査以降に集積された標本データも加え、これに踏査時の分布状況の記録を集約し検証を行った。特に重要な種については、神奈川県立生命の星・地球博物館（KPM）や相模原市立博物館（SCM）に保管された標本の記録を伴う文献情報を引用し、特に報文などが確認できなかった種は標本データのみを記した。

結果と考察

相模原市総務局総務課市史編さん室編（2009a）によると、相模原台地上に位置する相模原中央の年平均気温が 14.6 °C、年間の降水量は 1711.0 mm。小仏山地に

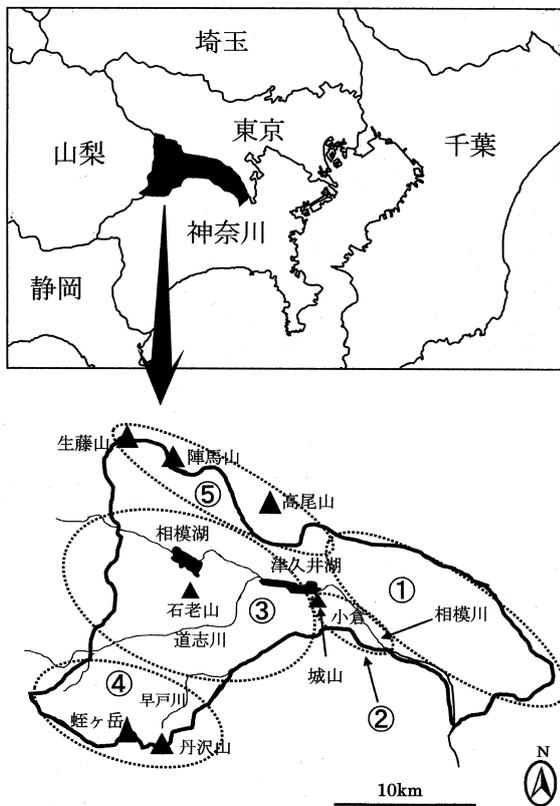


図 1. 相模原市域図と調査区分（①：相模原台地地区，②：城山以西の相模川沿い地区，③：相模川、道志川流域の里山地区，④：丹沢山地地区，⑤：小仏山地地区）。

近い相模湖では年平均気温が 13.8 °C、年間の降水量は 1641.2 mm（相模湖町史編さん委員会編，2008）となっている。しかし丹沢山麓の宮ヶ瀬湖では 2100 mm を超える年間雨量があり（相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館市史編さん班編，2013），箱根地区と並んで丹沢山地周辺も雨量の多い地域であり、相模原市域にある丹沢山地エリアも低標高域を大きく上回る雨量が推測される。また山間部では谷地形での冬季の放射冷却や、人造湖の湖水が周辺部の気温を調節する機能も確認されている（神奈川県厚木土木事務所津久井治水センター編，2013）。その他にも地形の影響による局地的な雨域の形成も観測されており（相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館市史編さん班編，2013），地形や立地条件がフロアの形成にも影響を与えていると推測される。また冷温帯域の山地性種や暖温帯の植物が、周辺の気温分布に同調せず分布域を形成しているケースも観察されるため（宮崎・秋山，2008），傾斜地の多い段丘崖や山間部においては、基盤岩やローム層上の表土の発達の間隔も様々で、フロアの成立にはそのような地質学的な要因も影響を及ぼしていることが考えられる。

上記のように様々な環境が現相模原市域で認められ、標本及び踏査時の分布状況の記録から、市内 5 地域（図 1：①相模原台地とほぼ重なる旧市域，②城山以西の相模川沿いに低標高の段丘が続く小倉地域，③相模川や道志川流域の里山地域，④丹沢山地，⑤小仏山地）において、それぞれ特徴的な種を含むフロアが成立していることが確認できた。以下にその地域ごとの特徴を記す。

地域別フロアの特徴

1. 相模原台地地区

(1) 地域の環境

多摩丘陵に近い相模原面の北西部の標高が 170 m 程と最も高く、この付近からは東京都との境界を独立河川である境川が流れ下る。台地上は水資源に乏しく、南部の段丘崖下部に湧水地が点在している。その段丘を形成した相模川がこの地域の南縁を流れている。またこの地域はほぼ全域が都市化したエリアであり、現在残されている緑地は、公園緑地として市内数ヶ所にあるクヌギ、コナラを中心とした雑木林や、境川や相模川流域の段丘斜面などであり、この地域本来の植物の分布もこれらの立地に限られる。

(2) フロアの特徴

1) 周辺地域との対比

相模原台地地区では、市域に隣接する横浜市や多摩地域と共通するイヌアワ、オオアオスゲ、ワダソウ、ノジトラノオ、ゴマギなどの分布も見られる。また市域南縁に位置する相模川中流域には、エノシマキブシやツルナ、ハマヤブマオ、ハマアオスゲなどの海岸地帯に多い種も確認されている。この相模川流域には、県内では相模原市と大和市にのみ分布するヤナギイノコヅチ

(SCM11597, 相模原市上大島, 1997.10.3) も段丘沿いに分布している。そのほか、県内では珍しいサイカチの分布が見られ、河川攪乱が繰り返されていた頃からの自生ではないかと思われる(伊藤ほか, 2015)。

2) 攪乱により消長する在来種と外来種

かつてこの乾燥した台地は「柴胡が原」と呼ばれ(秋山, 2005), 秣場(まぐさば)などに利用されていた草地にはミシマサイコ(セリ科)が繁茂していたが, 1934年の採集記録(金井, 1968)を最後に, 相模原台地上で自生のミシマサイコの分布は確認されていない(秋山, 2005)。一方都市化したこの地域の道路沿いや住宅地周辺は外来種の侵入口となっていて, 近年オオキンケイギクやナガミヒナゲシなどの増加が目立って来ている。秋山(2003)の報告によるとヨーロッパ原産で暖地性のニセカラクサケマンが国道16号線沿いの植え込みで発見され, その後10年近い間, 更新しながらほぼそのままの位置で生育が継続しているのが確認されている(秋山, 私信)。

境川流域では, 近年流路変更や護岸工事による攪乱が進み, 本来の植生部分が狭められてきているが, 川沿いのわずかな緑地にはヤマブキソウ, レンプクソウ, ヤマエンゴサクなどが保護された状態で残存している(太田・秋山, 2014)。また相模川の河川敷では, 上流にあるダムの洪水調節機能により, 洪水による攪乱の頻度が減り, アカメガシワやハリエンジュがまばらに生育する砂礫の河原を, シナダレスズメガヤやアレチウリなどが覆いつくしてしまっている場所も多い。しかし水際にはタチヤナギやオノエヤナギなどのヤナギ類の群生も見られ, カワラヨモギやカワラハハコなどととも, 2004年にはカワラノギクが再発見され, 現在市民の保護活動により分布が継続されている(秋山, 2006)。

2. 城山以西の相模川流域地区

(1) 地域の環境

市域西側から続く山間地域も城山(375 m)以東では, 相模川の南岸にある小倉山(327 m)をピークに標高100 m台の低山が続く。小倉山の尾根筋には, 県内で最も内陸に位置すると思われるスダジイやタブノキを中心とした照葉樹林が残存している(亀崎ほか, 2015)。また城山での最近の調査(神奈川県厚木土木事務所津久井治水センター編, 2013)では, 726種(亜種変種を含む)の植物が確認されている。この城山北側山腹の一部は, 幕政時代から「御林」として管理され「江川ヒノキ」と呼ばれる樹齢百数十年ともいわれるヒノキ林が狭い範囲だが残っている。なお樹齢900年と推定されていた自生の可能性もある巨大なスギは, 2013年8月の落雷により枯死してしまった。

(2) フロラの特徴

1) 周辺地域との対比

この地域に分布する植物種の内, カゴノキやイヌビワ, カラタチバナなどが城山より西側(相模川上流域)では

分布が確認されておらず, このあたりに暖地性植物にとっての分布境界が存在していると思われる。また城山にはツクバキンモンソウやキジョラン, タカオヒゴタイなど東京都側の高尾山などと共通する種も分布が確認されている。

2) 相模川中流域に広がる暖地性植物分布エリア

小倉山周辺では暖地性の植物が多く確認されていて(秋山, 2014a), 国内分布の北限に近いヒメモエギスゲなども含まれる(勝山輝男, 2001)。小倉山の山頂周辺に残る照葉樹林には, アカガシやツクバネガシ, ウラジログシ, アラカシなどのカシ類も多く, 土壌の形成度合いなどに応じた棲み分けを見せており, オオツクバネガシも分布している。また市域の他の地域ではほとんど見られないサカキの自生木も多く, かなりの年数にわたり大きな人為攪乱を受けずに来たものと思われる。

この小倉地区の南西側に隣接する三増地区の林内では, 勝山(2006)により近年箱根でも再発見されたヒメフタバランの群落が見つまっている(山口, 2008; 久江, 2010)。また2014年には流域の林内において, 県内初となるムヨウランの分布が確認された(秋山, 2014b)。ムヨウラン属のような菌従属栄養植物は, 木本類から菌類相に至る森林環境が維持された場所に生育する植物であり(末次, 2015), この地域内ではムヨウランの生育地が数箇所確認されていることから, 植物や菌類にとって整った森林環境が維持されていると思われる。

3. 相模川, 道志川流域の里山地区

(1) 地域の環境

この地域を流れる相模川流域には, 城山山麓の津久井湖とその10 km前後上流にある相模湖が水を湛えていて, その中間点あたりで支流の道志川が合流している。

この里山地域の低山地(最高地点は石老山の702 m)のほとんどがコナラを中心とした二次林と, スギやヒノキの植林地により占められている。長年放置されていた植林地が, 近年間伐されるようになり, 草本類やウツギなどの低木層が回復し, アラカシやシラカシなど常緑樹の幼木が育ちつつある状況も見られる。東京都の高尾山でも報告されているように(林ほか, 1966), この地域でも南西向きの斜面での常緑樹の割合が北向き斜面に比べ高い傾向が観察される。

(2) フロラの特徴

1) 周辺地域との対比

津久井湖より上流の相模川沿いには岩盤の露出した急崖が流路北側に多く見られ, ケヤキなどを交えたアラカシ林がほぼ純林を形成している。このような植分は, 相模川の上流域である山梨県内の桂川流域(大月市周辺)より下流域で共通して見られる(植松, 1981)。同様に相模川の段丘に沿って山梨県側から分布を拡大していると思われるものにアイズシモツケやオオバマンサク, ツクバネなどがあり(長谷川, 1988), タキザワザサなどスズガサ属の内の数種やアズマザサの分布が山梨県内か

ら点在しており、下流の旧市域内の段丘沿いまで続いている（三樹，2007）。このほか山梨県との県境を跨いで分布する種として、ザイフリボクやネズミサシなどもあるが、県境以西（山梨県内）までしか分布が確認されていないソヨゴ、アズマスゲ、イブキスミレなどもあり、エゾアオイスミレやゲンジスミレのようにわずかに神奈川県内へ浸入した形跡を残すものもある（高橋，2001）。

この地域にはカタクリやフクジュソウの生育地がわずかに残っているが、これらは本来日本海側に分布の中心を持つものであり（高橋，1985），この地域内では山頂近くや、沢や小川に沿った斜面林の林床に見られる。

2) 攪乱により消長する種

道志川合流点付近には、60～70年前まではオキナグサ（現地での地方名ビンタボ）の群落が存在していたことが周辺住民への聞き取り調査で判明しているが、現在では生育はまったく確認できない。またこの合流点付近は、ダム湖の水位の変化によって減水湿地が現れることがあり、一定期間陸化した場合ミコシガヤやオタルスゲといったスゲ属や、アゼテンツキなどのテンツキ類やタチヒメクダ、マツバイ、マツカサススキなどの中の数種が一斉に群落を形成する。上流側にある休耕田が種子の供給源である可能性もあるが、年により出現種は異なる。

現在相模湖の湖底となってしまっている地点では、1938年当時カワラノギクが確認されていて（田中，2013），かつてその辺りまでは中流域らしい礫の多い川原が存在していたことが考えられる。道志川渓谷の日当たりの良い岩場には、分布の東限であるサツキの生育が確認できるが（勝山・高橋，1991），残存する個体は人々が容易に立ち寄れないような条件の場所にのみ生育している。水を被るような岩場にはヤシャゼンマイやホソバコンギク、ケイリュウタチツボスミレ、サガミニガナなどの溪岸植物も豊富に見られる（田中，1999）。また本来はこうした溪流の岩場などに生育するツメレンゲが、相模湖（ダム湖）上流では人家の石垣に定着している場所が数箇所確認されている。

周期的な伐採や広範囲な皆伐を受けてきた雑木林や植林地の林床では、スズダケの群落がごく小規模で残っている。これは攪乱に拠る裸地化で林床性のスズダケが退行したためであり（林業科学技術振興所，1985），攪乱により退行した種のある反面、植林地（特にスギ林）の林床にはオシダ科を中心としたシダ類が多く見られ、特に沢沿いのスギ林には、県内に分布するイノデ類の大半（希少種のヤシャイノデや海岸部に多いアスカイノデを除く）の種が見られ、それらを両親種とした雑種個体も多様な組み合わせで出現する。

3) 里山地域上部のフロラ

標高400mを越えるあたりからはイヌブナも分布しており、数箇所ですぐも確認されモミやイヌシデ、アサダ、イタヤカエデなども交え冷温帯域への移行帯的な様相も部分的に存在する。またこの低山帯の峠部分に、冷温帯域では河畔などに群落を形成することの多いハルニ

レ（和田・菊池，2004）が出現することもある。これはハルニレが礫質堆積層を好むと同時に透水性の高い立地を選択する傾向のためかもしれない（菊池，2001）。

4. 丹沢山地地区

(1) 地域の環境

前述した道志川の南側に、丹沢山地北麓が位置しており、山北町や清川村と接する市域境界の尾根には丹沢山地最高峰の蛭ヶ岳（1673m）が聳え、前衛には姫次（1433m）、焼山（1060m）が位置している。その谷間を早戸川が流れ、下流の宮ヶ瀬湖に注いでいる。西端の大室山（1587m）の北側は山梨県となっている。山北町との境界尾根付近を源に、神ノ川が丹沢山地の山麓部を流れ、下流で道志川に合流する。

山麓部一帯には植林地が広がっているが、山地上部は急峻な斜面が多く、都市近郊に位置する割に人為的攪乱の少ない環境が存在していたのだが、近年ニホンジカの増殖による食圧のため山地全域での林床植生の退行が起こっており、田中（2005）が報告している山地上部の標高1400m以上に集中して分布することが多い希少種の内、クルマユリやクルマバツクバネソウなど19種の植物の減少が著しいことが分かった（勝山ほか，2007）。また植生保護のための柵が設置されているが、長く食圧を受け続けた林床では保護柵を設置しても再生する植物種の割合が低く個体数も少ない（田村，2010）。

(2) フロラの特徴

1) 周辺地域との対比

丹沢山地のフロラにはイワシャジンやマツノハマネンゲサなどで代表されるフォッサ・マグナ要素の種や、ウラハグサやシコクスミレなど襲撃紀要素の種も多く含まれる。しかしウラジロモミ、シコクハタザオなどは山地内全域に分布が見られるが、シモバシラやヤマカシウなど北丹沢や東丹沢にかけてのみ分布している種もある。またミヤマナルコユリやヒゴスミレは北丹沢のみに分布しており、これら丹沢山地北側に偏在する種の分布は、山梨県や奥多摩地域のフロラと類似性を持つ小仏山地との関連を示唆している（勝山ほか，1997）。

2) 山地性フロラ

市域内の低山帯上部も含め、山地斜面で特に崩壊が進む立地などにはタチキランソウが見られる。タチキランソウはキランソウに比してやや標高の高い、一層不安定な立地を選択している傾向が観察され、分布域から見て（相模原市は分布東限と思われる）フォッサ・マグナ地域で分化した種の一つかもしれない。

市域内では早戸川流域にのみ、オヒョウやウメウツギ、カツラの分布が見られる。またコミネカエデやホソエカエデ、ミヤマザクラなど、小仏山地側では見られないものも分布している。この早戸川流域ではトウゴクシソバタツナミ（久江，2008）やキンセイラン（久江，2011）、イヌマムカゴ（久江，2013）などの希少種の分布が近年確認されている。

また西側の山梨県境に近い神ノ川流域は崩落しやすい岩盤の露出部分も多く、ウラジロガシに混ざってドクウツギやヨコグラノキも確認されている。

5. 小仏山地地区

(1) 地域の環境

概ね東京都との都県境界に重なる尾根が、津久井湖北側から西へ延びていて、西端に聳える最高峰の生藤山(990 m)から先は、山梨県と東京都の間の笹尾根となって奥多摩方面へ通じている。丹沢山地に比べ平均標高も低く、一概に丹沢山地の高標高域のフロラとの比較はできないが、山頂付近は冷温帯域に達しておりミズナラ林が尾根上に広がっている。しかしこの山域ではブナの自生をほとんど確認する事はできず、東京都側の標高 600 m にも満たない高尾山にブナが残存している事を考えると、この地域がいかにか人為攪乱を受け続けてきた地域であるかを示唆している。

(2) フロラの特徴

1) 周辺地域との対比

カナウツギのように丹沢山地側では頻出するが、小仏山地側ではほとんど見られなくなるものがあり、逆にナツハゼやミツバフウロ、アズマレイジンソウなどのように少ないが小仏山地側のみ分布している種も存在する(勝山ほか, 1997)。陣馬山(854 m)周辺ではヤエガワカンバ(大森, 2001)の分布が確認されており、山梨県や奥多摩方面など内陸山地からの隔離分布の可能性もあり、丹沢山地以上に、隣接する山梨、奥多摩地域などとの関係による内陸型気候の影響の現れと見られる(高橋, 1985)。

ササ類でも、丹沢山地には現れないミヤコザサ節の種(ニッコウザサ)が分布しており、オオガンクビソウやカメバヒキオコシなどの県内でも貴重な分布地でもある。

2) 人為利用と交雑種

この山域の日当たりのいい斜面や林内などには、カシワが多く分布している。その源は人為の歴史に起因しており、自生していたカシワを保護しながら利用する半栽培を行い、魚網染料の原料としての樹皮や餅を包むための葉を特産物として産出していた(原, 1981)。この神奈川県北西部にはカシワを食餌植物とするハヤシミドリシジミ、ウスイロオナガシジミなどの蝶の分布が重なっており、カシワを多く含む植生の歴史の古さを表している(原, 1981)。小仏山地上部にはカシワを含んだミズナラ、コナラの三種が混生する樹林が存在しているため、ホソバガシワ(カシワ×ミズナラ: 2006.10.13 相模原市陣馬山 SCM0610168)やコガシワ(コナラ×カシワ)と推定される交雑個体が出現する。陣馬山におけるコナラ属の雑種個体の出現率は、三種の混生林におけるコナラ属全体の出現個体の 35% に上るという調査結果も報告されている(豊田ほか, 1986)。なお小仏山地から数キロ南に離れた低山の嵐山(405 m)山頂で、ミズナラが付近に生育していないにも関わらずミズコ

ナラ(ミズナラ×コナラ: 2008.10.21 相模原市奥畑 SCM0810208)と同定される個体も確認されている。

ま と め

相模原市域におけるフロラは、低標高域から丹沢山地上部に続く 1500 m を超える標高差を反映した気候環境に、変化の多い地形環境などが相俟って多様な様相を呈している。城山以東の相模川流域に見られる暖地性種の分布をはじめとして、山梨県側から相模川沿いに分布を広げている種や、東京都奥多摩地域から小仏山地を越えて分布域を広げている種などが確認されている。調査結果の集積により、様々な環境要因が輻湊し入り組んだフロラの存在が鮮明になってきたと言える。また相模原市域西部の山間部は、丹沢山地の高標高域を除き、かなり人為的影響を受け続けてきていると推測され、フロラの中にも人為攪乱を反映したと思われる部分が認められた。

謝 辞

執筆にあたり神奈川県立生命の星・地球博物館の勝山輝男氏には県レベルでの植物分布情報をご教示頂き、大西亘氏には文献検索に関する情報を頂いた。相模原植物調査会の秋山幸也、田中良也両氏には標本データの抽出にご協力頂いた。そのほか同調査会の会員諸氏には貴重なご意見を頂いた。また相模原市域フロラの解明は、会員であり元相模原市立博物館資料調査員の宮崎卓氏をはじめ、会員諸氏による調査活動の成果であり、改めて敬意を表したい。

引用文献

- 秋山幸也, 2003. 相模原市内でニセカラクサケマンを確認. *Flora Kanagawa*, (55): 664-665.
- 秋山幸也, 2005. ミシマサイコはいつ、どのように相模原から絶滅したのか?. 相模原市立博物館研究報告, (14): 71-76.
- 秋山幸也, 2006. 相模原のカワラノギク衰退と復活, そして再生へ. 相模原市立博物館研究報告, (15): 85-90.
- 秋山幸也・宮崎卓, 2008. 相模原市の絶滅危惧植物. 相模原市立博物館研究報告, (17): 85-91.
- 秋山幸也, 2010a. 相模原市でコマツカサススキを確認. *Flora Kanagawa*, (69): 841-842.
- 秋山幸也, 2010b. 相模原市内でウスヒメワラビを確認. *Flora Kanagawa*, (71): 861-862.
- 秋山幸也, 2014a. 小倉山およびその山麓における維管束植物標本目録. 相模原市立博物館研究報告, (22): 99-108.
- 秋山幸也, 2014b. 相模原市緑区でムヨウランを確認. *Flora Kanagawa*, (78): 923-924.
- 原 聖樹, 1981. 人為の歴史をとおしてみた県北のカシワ林の消長とシジミチョウ. 神奈川自然誌資料, (2): 1-10.
- 長谷川義人, 1988. 植物雑記 (52) 神奈川県津久井郡の植物相. *Makino*, (51): 5-7. 牧野植物同好会, 東京.
- 林 弥栄・小山芳太郎・小林義雄・大河原利江・峯尾林太郎・飯田重良, 1966. 高尾山天然林の生態ならびにフロラの

- 研究. 林業試験場研究報告, (196): 1-167.
- 久江信雄, 2008. 丹沢三峰にトウゴクシソバツツナミ. *Flora Kanagawa*, (67): 820.
- 久江信雄, 2010. 続三増のヒメフタバラン. *Flora Kanagawa*, (69): 837-838.
- 久江信雄, 2011. 丹沢でキンセイランを発見. *Flora Kanagawa*, (73): 875-876.
- 久江信雄, 2013. イイヌマムカゴの再発見. *Flora Kanagawa*, (75): 895-896.
- 伊藤彩乃・河上友宏・百原 新・三島孔明, 2015. サイカチ (*Gleditsia japonica* Miq.) の異なる立地環境での更新特性. *植物地理・分類研究*, 62(2): 75-84.
- 亀崎誠・秋本和弘・小林力・永井充・三樹和博・宮崎精励・久江信雄・秋山幸也, 2015. 小倉山照葉樹林植生調査報告. 相模原市立博物館研究報告, (23): 67-81.
- 神奈川県厚木土木事務所津久井治水センター編, 2013. 県立津久井湖城山公園自然環境調査報告書. 221+237pp. 神奈川県厚木土木事務所津久井治水センター, 相模原.
- 神奈川県公園協会丹沢大山自然環境総合調査団企画委員会編, 1997. 丹沢大山自然環境総合調査報告書 丹沢山地動植物目録. 389pp. 神奈川県環境部, 横浜.
- 神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌 2001. 1582pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 金井茂, 1968. 相模原の「柴胡」始末記. *多摩の自然*, (21): 4-7.
- 勝山輝男・高橋秀男, 1991. 神奈川県におけるサツキの分布状況. *神奈川自然誌資料*, (12): 57-60.
- 勝山輝男・高橋秀男・城川四郎・秋山守・田中徳久, 1997. 第7章 植物相とその特色. 神奈川県公園協会・丹沢大山自然環境総合調査団企画委員会編, 丹沢大山自然環境総合調査報告書, pp543-558. 神奈川県環境部, 横浜.
- 勝山輝男, 2001. スゲ属. 神奈川県植物誌調査会(編), 神奈川県植物誌 2001, pp442-482. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 勝山輝男・田中徳久・木場英久, 2006. 維管束植物. 神奈川県立生命の星・地球博物館編, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp37-222. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 勝山輝男, 2006. ヒメフタバランが健在. *Flora Kanagawa*, (62): 770-771.
- 勝山輝男・田村 淳・田中徳久, 2007. II 維管束植物 1. 丹沢の維管束植物相. 丹沢大山総合調査団(編), 丹沢大山総合調査学術報告書. pp89-94. 平岡環境科学研究所, 相模原.
- 菊池多賀夫, 2001. 地形植生誌. 220pp. 東京大学出版会, 東京.
- 国立公園協会編, 1964. 丹沢大山学術調査報告書. 477pp. 神奈川県, 横浜.
- 三樹和博, 2007. 相模川中流域におけるスズザサ属植物の分布とその特徴. *富士竹類植物園報告*, (51): 31-38.
- 宮脇 昭, 1972. 神奈川県の現存植生. 789pp. 神奈川県, 横浜.
- 宮崎 卓・秋山幸也, 2008. 相模原市津久井地域の植物相(第1報). 相模原市立博物館研究報告, (17): 93-122.
- 宮崎 卓・秋山幸也, 2009. 相模原市津久井地域の植物相(第2報). 相模原市立博物館研究報告, (18): 49-62.
- 宮崎 卓・秋山幸也, 2010. 相模原市津久井地域の植物相(第3報). 相模原市立博物館研究報告, (19): 75-84.
- 大森雄治, 2001. カバノキ科. 神奈川県植物誌調査会(編), 神奈川県植物誌 2001, pp546-553. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 太田浄子・秋山幸也, 2014. 古淵野森公園におけるヤマブキソウの順応的管理. 相模原市立博物館研究報告, (22): 87-92.
- 林業科学振興所, 1985. 関東・中部地方におけるササ資源量および我が国の地域別ササ資源量の事前評価. 農林水産省大型別枠研究(バイオマス変換計画) 委託事業報告書, pp1-82.
- 相模原市教育委員会社会教育部社会教育課編, 1988. 相模原市の植生. 227pp. 相模原市教育委員会社会教育部社会教育課, 相模原.
- 相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館市史編さん班編, 2013. 津久井町史自然編. 678pp. 相模原市教育委員会生涯学習部博物館市史編さん班, 相模原.
- 相模原市立博物館編, 2003. 相模原植物誌 I 標本目録. 相模原市立博物館資料目録 5, 178pp.
- 相模原市総務局総務課市史編さん室編, 2009a. 相模原市史自然編. 443pp. 相模原市総務局総務課市史編さん室, 相模原.
- 相模原市総務局総務課市史編さん室編, 2009b. 相模原市史調査報告書 2 動植物調査目録. 505pp. 相模原市総務局総務課市史編さん室, 相模原.
- 相模湖町史編さん委員会編, 2008. 相模湖町史自然編. 529pp. 相模湖町史編さん委員会, 相模原.
- 末次健司, 2015. 菌従属栄養植物の不思議な生活を探る. *分類*, 15(2): 99-108.
- 高橋秀男, 1971. フォッサ・マグナ要素の植物. 神奈川県立博物館調査研究報告(自然科学), 第2号, 63pp.
- 高橋秀男, 1982. 維管束植物による相模川流域の環境評価. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (13): 91-123.
- 高橋秀男, 1985. 神奈川県の植物地理. *神奈川自然誌資料*, (6): 1-11.
- 高橋秀男, 2001. スミレ科. 神奈川県植物誌調査会(編), 神奈川県植物誌 2001, pp1009-1023. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 田村 淳, 2010. ニホンジカの採食により退行した丹沢山地冷温帯自然林における植生保護柵の設置年の差異が多年生草本の回復に及ぼす影響. *保全生態学研究*, 15(2): 255-264.
- 田中徳久, 1999. 神奈川県のサツキ群落. *神奈川自然誌資料*, (20): 103-108.
- 田中徳久, 2002. 各都道府県別の植物自然史研究の現状 14. 神奈川県. *植物地理・分類研究*, (50): 177-178.
- 田中徳久, 2003. 標本データを使った神奈川県の111個の地域メッシュによる植物地理. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (32): 7-22.
- 田中徳久, 2005. 神奈川県においてレッドデータ植物が集中して分布する地域の抽出. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (34): 47-54.
- 田中徳久, 2013. 標本庫の標本に基づいて明らかにされたカワラノギクの分布域. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (42): 23-34.
- 丹沢大山総合調査団編, 2007. 丹沢大山動植物目録. 丹沢大山総合調査学術報告書 2007-2. 472pp. 平岡環境科学研究所, 相模原.
- 豊田武司・染郷正孝・大河原利江, 1986. 陣馬山のカシワ・ミズナラ・コナラ混生林における花粉の個体変異. *日本林学会関東支部大会発表論文集*, (38): 101-102.
- 植松春雄, 1981. 山梨の植物誌. 595pp. 井上書店, 山梨.
- 山口勇一, 2008. 三増のヒメフタバラン. *Flora Kanagawa*, (67): 820.
- 和田美貴代・菊池多賀夫, 2004. 上高地梓川氾濫原におけるハルニレの実生の発生と定着. *植生学会誌*, 21(1): 27-38.